



介護リスクマネジメントNEWS

利用者が自宅玄関で転倒し骨折した事例

身体状況が改善してきた利用者への過信はなかったか

サービス種別 訪問介護

トラクレ種別 骨折

発生場所 自宅玄関

介護状況 介助中

本人の状態 右大腿骨骨折

ご利用者Aさんの状態

- Aさんは、事故当時80歳の女性で、糖尿病と腎不全の既往歴があり、人工透析が必要な状態。以前から、人工透析のための通院時に訪問介護サービスを利用していました。
- Aさんは腎不全の悪化により約3か月間入院していた。退院時には脚力が低下しており、歩行や立位・座位の保持は「支えがあれば可能」な状態であった。
- 退院後、Aさんの通院介助量は入院前よりも増え、屋外での移動は車椅子を使用することになった。訪問介護サービスの手順書では、まずヘルパーが屋外で保管している車椅子を広げて玄関の外に準備する。その後、Aさんは歩行器を使用して玄関に移動し、靴を履くために玄関の上がりかまちに座る。ヘルパーがAさんに靴を履かせた後、Aさんは左手で杖をつき、右手はヘルパーに支えてもらいながら玄関外に準備された車椅子に乗る流れであった。また、歩行や立位時には転倒に注意して介助・見守りをするよう指示されていた。
- 退院後約1か月半が経過すると、Aさんは自宅内では杖や手すりを使用し、壁沿いにすり足で歩行できるようになり、手すりや杖を利用すれば30秒から1分程度は立位を保持できるようになった。ヘルパーの状況報告書には、「移動時の動きは退院直後よりも改善している。転倒に注意して介護サービスを行っていく」と記載されていた。

事故発生時の状況

- 事故当日、Aさんは自室から玄関まで杖と手すりを使って歩行し、上がりかまちまで移動した。
- ヘルパーが支えながら、Aさんは上がりかまちに腰を下ろし、ヘルパーはAさんの正面に回って靴を履く介助をした。その後、Aさんは上がりかまちに座った状態から、右手を下駄箱に置き、左手は杖をついてヘルパーの助けを得ながら立ち上がった。
- その際、ヘルパーは玄関の外に車椅子を準備するのを忘れていたことに気づき、Aさんに「車椅子を準備してきますので、そのまま待っていてください」と伝え、玄関の外に出た。
- ヘルパーが車椅子の準備をしていると、Aさんの「あっ」という声が聞こえたため、ヘルパーが急いで玄関に戻ると、Aさんが玄関の土間で転倒していた。
- Aさんが右足の痛みを訴えたため、ヘルパーは事務所に連絡して指示を仰いだ。Aさんは救急車で病院に搬送され、右大腿骨の骨折が判明した。

皆さんで考えてみましょう！

Q. トラブル予防の観点から、何ができたでしょうか？



利用者が自宅玄関で転倒し骨折した事例

身体状況が改善してきた利用者への過信はなかったか

今回のトラクレ事例の対応から学べることを考えてみましょう！

この事例の対応のポイント

今回のトラクレ事例の対応のポイントを3つあげてみました。これ以外にも様々なポイントが考えられると思います。みなさんも意見を出し合ってみてください。

ポイント①：手順書に基づく介助の徹底

- 手順書では、外出用の車椅子を玄関の外に準備してからAさんに玄関まで移動してもらうこととなっていたが、準備がされていなかった。
- 「歩行や立位時には転倒に注意して介助・見守りをする」とされていたが、Aさんが立位のまま玄関から離れた。一旦、上がりかまちに座って待機してもらい、ご家族がいれば見守りをお願いするなど、安全を優先する対応が必要であった。
- サービス提供責任者は、Aさんへのサービスが適切に提供されているか確認する機会を持っていたか。

ポイント②：Aさんの身体状況の把握

- Aさんが退院直後に比べて身体状況が改善していると考え、「このくらいは大丈夫だろう」と過信していなかったか。
- 高齢者の身体状況が日によって異なることを認識し、その日のAさんの身体状況を把握するよう努めていたか。

ポイント③：適切な介助方法の検討

- 担当ヘルパーは、Aさんの身体状況の変化をサービス提供責任者に伝え、身体状況に合ったサービス手順や留意点の共有を提案していたか。
- サービス提供責任者は、サービス再開直後のAさんの身体状況について積極的に情報収集し、モニタリングを実施していたか。また、適切なサービス手順や留意点をヘルパーに共有していたか。

今回の事故は、介助手順の不徹底が大きな原因であり、安全な介護の重要性と手順遵守の必要性を改めて浮き彫りにしました。また、サービス提供責任者による適切なモニタリングと手順の見直し、ヘルパーへの共有も非常に重要です。



<情報提供元>

東京海上日動ベターライフサービス株式会社
ソリューション事業部